

中級学習者のプロジェクトワーク 国際大学における実践報告

加藤陽子
国際大学
日本語プログラム

1 はじめに

本稿は、1997 年 1 月から 3 月にかけて国際大学中級日本語クラス（名称は「日本語 5」、300 時間修了程度）で行ったプロジェクトワークの実践報告である。本稿では指導の実際を報告した後、教師側が気づいたこのレベルの学生の言語的な、あるいは技術的な問題点と、学生側から見たプロジェクトワークのありかたに対する意見の双方を観察し、改善点を探ってみたい。

2 発表会およびプロジェクトワークの目的

国際大学日本語プログラムでは、1993 年から毎年一回、大学関係者や地元の方を招待して日本語発表会を開催している。これは、日本語で何かのテーマについて発表する機会を学生に与え、地元の方々との交流を進めるという趣旨で行われているものである。国際大学では、授業中のみならず日常生活でも英語が学内の媒介言語として使われているという性格上、日本にある大学でありながら日本語に触れる機会が少ないという事情がある。また、地理的に大学が町の居住地域から離れていることから、町の方々と日常的な交流を持つ機会が限られている。このようなハンディを少しでも克服するべく、学生が学習したものを教室以外の所で実際に使い、表現する場を与えるのが発表会の目的である。

発表会で発表する内容は学習者のレベルによって異なる。過去 4 回の発表会のうち、学習時間が 150 時間程度の初級学習者は、学習した項目を使って創作したスキットやスピーチを、また、学習時間 450 時間以上の中級後期ないし上級前期の学生は、個人で課題を決めて取り組むプロジェクトワークやスピーチを行っている。

本稿で取り上げるグループプロジェクトワークは、学習時間 300 時間程度修了の中級前期の学生が行ったものである。このレベルの学生は基本的な初級文型の学習が終了し、学習者用に作られた教材から専門性を加味した生の教材に少しずつ移行していく時期にあたる。このプロジェクトワークはコースを構成するさまざまな教室活動の一部として日本語 5 のコースに組み込まれ、話す・聴くを中心としたこのコースの中では次のような位置を占めるものであった。（以下、1997 年日本語 5 コースシラバスから抜粋）

<全体の目標>

日本語が使える場面を増やし、同時に、正確に使える機能を増やす。

＜そのために＞

- ・予約・面接・連絡・電話の受け答え・正式なあいさつなどをロールプレイ練習する。
- ・会社や博士過程の面接の練習をする。ビデオを見たり、日本の会社の人に話をしてもらったりする。
- ・グループプロジェクトをする。地元の人に意見を聞いたり、データを集めたりして、自分たちのテーマについて調べる。また、表（グラフ）の読み方などを勉強し、プロジェクトの結果をクラスの中で発表する。また、四月に地元の人を招待してもう一度発表をする。

3 プロジェクトの概要

では、以下、実施したプロジェクトワークの概要を述べる。

3・1 プロジェクトのテーマ

学生に与えた大きいテーマは、「日本人は _____ についてどう思っているか」というものであった。学生はこの下線部に関心がある言葉を入れ、4人までのグループを作り、グループ単位で活動した。日本人の意見を知る、という趣旨から、文献調査だけではなく必ずアンケートあるいはインタビューを行うことを義務付けた。履修している学生22名は7つのグループに分かれ、それぞれ以下のような課題に取り組んだ。

グループ A	日本の贈答の慣習	4名（マレーシア・アメリカ・タイ・中国）
B	親と子どもの関係	4名（バングラデシュ・タイ・セルビア・イギリス）
C	いじめ	4名（フランス・カナダ・アメリカ2名）
D	日本と国連	3名（タイ・ドイツ・中国）
E	男女が異性に期待すること	3名（バングラデシュ・インドネシア・レバノン／アメリカ注1）
F	日本経済	2名（ウズベキスタン・アメリカ）
G	男女の責任や役割	2名（ネパール・中国）

グループを作る際、出身国のことについては特別な配慮はしなかった。しかし、結果的にかなり分散し、同じ出身国の学生が二人いたのは一つのグループだけで、あとの6つはすべて異なった国の学生からなるグループ構成であった。

3・2 コースの中での時間数

日本語5は1997年1月6日から3月7日までの9週間の授業（一コマ90分×5日）及び3月

10日から17日までの約一週間の試験週間の、計10週間からなるコースである。そのうち、プロジェクトワークに当てられたのは9週間の授業週間のうち毎週木曜日の平均約45分間、そして試験週間中のクラス内での発表会一日の計十回である。また、プロジェクトワークの発表原稿を書くための準備として、学生は7・8週間目の月曜日にグラフや表の読み方・説明の仕方についての指導を受け、8週間目から9週間目にかけてグラフや表の説明を中心としたテキスト（羽田野洋子・倉八順子 1995 古今書院発行『日本語の表現技術』より「日本の就業構造」の一部）を使って、説明に必要な表現を学習した。（注2）

3・3 学習の経過

以下、学習の経過をプロジェクトに当てた時間計10回（毎週木曜日）の内容を中心にして、簡単にまとめる。

<1週間目>

プロジェクトワークの大きいテーマ・目的・10週間の流れ・成績と評価についての説明を教師が行った。具体的な個々のテーマについては、過去学生が取り上げたテーマの例をいくつか紹介しただけで、その選択は学生の自由とした。

また、最終的なプロダクトである発表会の雰囲気をつかませることを目的として、去年の発表会の模様を録画したビデオを見せた。

宿題として、次週までにグループを作り、テーマを決定してくるよう指示した。

<2週間目>

スケジュール表（資料1）を配布し、予定について説明した。1996年までは、学生が各グループでなすべき活動を決定し、プロジェクト完成までのスケジュールを作り実行する、という方法をとっていた。しかし、例年スケジュール作成そのものにも時間がかかり、予定通りに進まずインタビューやアンケートの質問用紙が提出されるのが最終発表の2週間前、などというグループもあったため、今年は最低すべき活動をアンケート調査あるいはインタビュー（注3）とし、質問用紙の原稿メ切日及び、発表原稿の提出メ切日などのスケジュールを教師側が作成し提示するという方法を取った。

また、グループ毎に分かれ、テーマについて調べたいこと・調べるためにしなければならないことを話し合い、プリント（資料2）に記入させた。次週までの宿題としてこの資料2を各グループで一枚提出するよう、指示した。

<3週間目>

グループで一人代表者を出し、各グループで記入した資料2をもとに、自分達のプロジェクトワークのテーマ、具体的に調べたいこと、調査方法等を口頭で発表させた。これにより、他のグループのメンバーとお互いのしていることがわかるようになった。

また、次週までの宿題として、資料2の「このテーマについてどんなことを調べたいか」という部分を発展させ、アンケートの原案となる質問事項を書き出してくるよう指示した。

< 4 週間目 >

アンケートの質問用紙をグループで作成した。教師は、学生の質問に答えたり、学生が書いた文を添削したり、といった補助的な役割をした。この週の木曜日が、アンケートの草稿提出メ切日であった。教師は集まった草稿を添削し、アンケートの体裁や内容の質問の足りない点についてコメントし、学生に返却した。次週木曜までの宿題として、週末をかけてアンケートを修正し、最終稿を作成するよう指示した。

< 5 週間目 >

この週の木曜日は、アンケートの最終稿提出メ切日であった。まだ草稿の修正がすんでいないグループは、最終稿作成作業をし、既に終わったグループは、アンケート配布・回収の計画を話し合った。この日に提出されたのはアンケート最終稿であったが、更に修正の必要があるグループが多かったため、実際の最終稿は3稿目以降になった。次週の木曜までの宿題は、アンケートを実際に配布・回収することであった。

< 6 週間目 >

学生は5週間目の週末に配布したアンケートで実際に回収できた分を集計した。この時点でさほど集まっていなかったため、大部分のグループは、これ以降の作業の分担について話し合いをした。次週までの宿題は回収したアンケートの集計作業をつづけることであった。

< 7 週間目 >

この週より、月曜日に約一時間を費やし、グラフや表の読み方の指導が始まった。この週は「x % 以上・以下・未満・強・弱」等の数値の表し方や「x 割を占める／超える／上回る／下回る、x % に達する」等の数値の捉え方を学習した。学生は、あるグラフを見てそれについて説明する、という練習を行った。木曜日には、学生はアンケートの集計作業を続けた。次週まで集計を完全に済ませ、どの質問に何と答えた人が何%いた、と言った数値を最低限出してくるように指示した。

< 8 週間目 >

この週の月曜日は、学生は「増える／減る」などの数値の変化を表す表現について学習した。前の週に引き続き、数値の変化の表現を使って実際にグラフを説明する、という練習も行った。

木曜日、学生は発表原稿作成の準備に取りかかった。まず、発表原稿に盛り込まなければならない情報（テーマ・メンバーの紹介・調査の対象・調査方法・アンケートの概要説明・分析結果の発表・考察や意見と理由・結論・感想等）は何であるか、そしてそれらはどのような順番で並べるのが効果的か、の二点についてクラス全体でブレインストーミングをした。また、それらの情報をどんな文型や表現を使って言うのが効果的かをクラス全体で考えた。そのあと発表の一つのモデルとして資料3を提示し、使われている文型や情報のならべかたについて確認した。なお、これはあくまで一つのモデルを提示したのにすぎず、学生の創意工夫で色々な発表のパターンが可能であることを説明した。この週まで

で集計が完了していることになっているので、次週木曜までの宿題は上記の情報を盛り込んで、実際の発表原稿をグループで分担して書いてくることであった。また、同日（木曜日）から、発表原稿作成に平行して、前述した、表やグラフを説明したテキストの学習を開始した。学生は主に結果の説明に使える文型（…は…と…から成る、…を主として、…に占める…の割合は、等）や言葉（増大する、等）について学習した。

< 9 週間目 >

この日が発表原稿のメットであったため、各自、分担部分の原稿作成に取り組んだ。各自の作業が中心となっていたため、教師が関与することは少なかった。教師は原稿提出後、添削し返却した。学生は各自、週末をかけて最終稿の作成・発表の練習を行った。

< 10 週間目 >

クラスで発表会を行った。これは、日本語 5 の期末発表であると共に、4 月に行われる学外の方も招待した発表会の前段階に当たるもので、教師はこれにより発表会で発表するグループ（2、3 組）を選んだ。また、これはビデオに録画され、後に学生はそれを教師と一緒にしながら発表の仕方、OHP の使い方等に関するフィードバックを受けることになる。

4 学生へのフィードバック……プロジェクトワーク改善のために

学生が提出したアンケートや最終報告書の草稿を添削すること、そして実際の発表を聞くことで、このレベルに欠けている能力、そしてフィードバックが必要な箇所がわかった。これには表現力といった言語的な面と、わかりやすいアンケートやグラフ作成、そして口頭発表力という技術的な面がある。ここではその両面について気がついたことを記したい。

4・1 アンケート

4・1・1 指示の出し方と質問の種類

アンケート調査の場合、質問の作成者がその場にいない場合が多いため、回答者の質問に直接答えられないことが多い。従って、質問の指示は誤解を生まないよう、はっきりとしたものでなければいけない。アンケートの草稿では、選択肢の中から一つ選ぶのか・複数でもいいのか、重要度に応じて順番をつけるのか、といった回答のしかたがはっきり指示されていないものが多く見られた。草稿提出後、作成した学生と話し、回答の仕方を特定して訂正したが、アンケートを作る際に、質問のパターンの多様なサンプルを教師側からモデルとして提示する必要があったと思われる。

また、質問の種類が、「はい」か「いいえ」と答えるだけで、それを選択した理由や意見を聞くといった発展性がないもの、また、すべての質問に選択肢が用意されていて、何かについての意見を自由に書く所がないものなどもあった。これらのように理由や意見を自由に書く質問がない場合は、最終報告の発表が集計結果の数値を読み上げるだけのものになってしまい、集めたデータから何が読み取れ

るか、といった回答の背景に迫ることが難しくなりがちである。また、実際に日本人が書いた自由な意見を読んで内容を理解することも重要な練習の機会である。このことも考えあわせれば、多様な質問のパターンのサンプルを示し、幾つかの種類の質問を使うよう勧めることはアンケートから多くの情報を得るためにも必要な事である。

4・1・2 アンケートのフォーマット

質問の指示のことは前述したが、それに加えて、アンケートそのものについての説明（アンケートの目的・作成者などについて述べた、カバーレターにあたる部分）や、回収方法の指示が十分に説明されていないグループがあった。これは口頭で直接記入を依頼する場合には必要ないことではあるが、最低だれがこのアンケートに関わっていて、どんな目的でしているかについては記入するよう指示した。

4・1・3 アンケートで使う言葉のスタイル

アンケートは不特定多数の回答者の目に触れるものであるため、アンケートに使う文のスタイル及び言葉の選び方には、細かい指導が必要である。このレベルでは、丁寧に質問をしなければならないという意識はあっても、語彙の改まりの程度のところまでは意識が及ばないようである。「男の人への質問」ではなく「男性への質問」、年齢を聞く際に「何歳ですか」ではなく、「年齢：____歳」のようにして下線部に記入してもらうなど、一般成人に向けたものとして許容できる改まりの程度にすることが必要であった。一方、今回のプロジェクトワークでは、「いじめ」について取り組んだグループが、小学生にもアンケート調査を行ったため、前述したことは反対に、漢語を多用した改まった表現から小学生にもわかりやすい表現に変えていくという作業も必要であった。

以上挙げた点をまとめると、アンケートを作る前に、学生にフォーマットや質問の種類についてのモデルを教師が提示したり、それについて学生と話し合ってみたりすることが今回のプロジェクトワークには欠けていたことがわかる。また、改まりの程度を回答者にあわせてコントロールできるよう、語彙のレベルでの指導の重要性も感じた。これらは改善点として次回につなげていきたいと思う。

4・2 発表原稿

4・2・1 表やグラフの説明の仕方

数値の言い方については、事前に練習したが、実際に学生が書いた文を見ると、表現の仕方の間違いが見られた。それは、「以下」と「未満」を取り違えるという単純なものから、「2%に達した、70%弱に達した」など、数値を多いと捉えるのか少ないと捉えるのかが整合していないもので、さまざまであった。また、同じ60%という数字でも、それを単に「60%だった」と言うのか、「60%に達した」と言うのか、「60%に過ぎなかった」と言うのか、ネイティブスピーカーなら、この三つを使い分け、60%という数値をどのように捉えているのかを示しつつ、その数値の意義付けの仕方に沿った論調で議論を展開していくことができるであろう。数値を正しく言えるようになったら、次の段階と

して、結論として言いたいことの伏線を数値の表現の形で示しつつ論を進めていくことができるような指導も必要だと思われる。

4・2・2 事実と意見の述べ方

「この結果によるとこの問題に反対している人は80%です。」のように、ある事柄を事実として述べるか、あるいは単に調査結果として述べるかによる使い分けがなされていない文も多く見られた。

また、得られた数値の背景にある日本人の考え方を学生が推測して書く場合、「…と思われる」「…のではないだろうか」「…ようだ」などの断定を避けた表現がまだ使いこなせず、「…です」と言った確定的な文末の述べ方で終止してしまう場合も見うけられた。これについては事実の述べ方と自分の意見の言い方の区別、文末のバラエティなどの表現力に関する点を指導する必要があると思われる。

4・2・3 表やグラフの書き方

質問の結果をまとめたグラフや表について学生が案外見落としがちだったのが、グラフや表に題名をつける、ということであった。これがない場合、グラフにそのまま回答の内容とその割合を載せなければならず、グラフが煩雑な印象を与えるものになってしまう。また、グラフは視覚に訴えるものであるため、それぞれの項目を見やすくするための工夫（色分けやグラフの種類の選択など）がしてあることも重要である。

4・2・4 発表の構成

表やグラフを使って複数の学生が続けて発表する場合、つまり聴衆がいろいろな所に視線を動かさなければならない場合、必要なのは発表の構成自体を言語化してその都度注意を喚起することである。

表やグラフの説明に移るときの「ではグラフをご覧ください」、段落の始めの「ここからは…について説明いたします」、段落の終わりの「ここまでは…について説明いたしました。では次に…」、発表者が変わるときの「次は…さんが…について報告いたします」のような言葉は、聴衆の理解を助け、注目すべきところに集中させるという重要な機能を担う。学生の書いた文にはこのような表現が明示的に書かれておらず、（原稿を読んだらわかることでも）音声だけでは段落の切れ目や文の前後関係が分かりにくいものが多くあった。上記のような表現以外では、接続詞・ポーズで同様の効果をもたらすことができるが、これらを総合的に使いこなし、聴衆に発表を効果的に理解させることができるようにするための指導が必要であると感じた。

5 学生からのフィードバック（アンケート調査から）

今回のプロジェクトワークを学生がどう評価し、どのように取り組んだかを調べるために、資料4に掲げたアンケート調査を実施した。学生22名中、回答者は9名と、2分の1に満たなかった。従

って、ここでは数量的な分析は行わず、全体的な傾向を紹介するのにとどめる。

5・1 調査の動機

アンケートを作成し学生からの意見を求めた理由は大きく分けて3つにまとめられる。その一つは、学生がプロジェクトワークを「させられている」という意識があるのではないか、という危惧の念が教師側にあったからである。今回は学期（1月から3月まで）の中でプロジェクトワークを終了しなければならないという時間的制約があったため、計画の大まかなところは教師が指示し、調査方法も質問表を作って最低限アンケートかインタビューをする、ということを課した。このように教師側が指示したことが多く、その役割は裏方として学習者を支えるというよりは、「引っ張っていく」という状態に近いものがあった。学生全てが受動的な態度でプロジェクトワークに臨んでいたわけではない。しかし中には「言われた通りに動くが、言われなければ動かなくてもいい」という意識でプロジェクトワークに臨んだ学生がいるのではないか、という危惧が教師側にあったのである。

二番目の理由は「学生がプロジェクトワークを通じてどんなことを学んだか」という事を調べ、さらに「教えなければならないこと・あまり必要ではなかったこと」を知ることである。この「何を学ばなければならないか」という問いは、教師側からの「何を教えなければならないか」という問いに対応するものである。

三番目の理由は、どのようなプロジェクトワークであれば自律的にこなすことが可能か、そしてプロジェクトワークを良くするために学生は具体的に何をしたらいいと思っているか、という事を知ることである。このコースをとっている学生は、ほとんどが3ヶ月後に卒業を控えた大学院生であるため、専門の授業に忙しく、かなりきついスケジュールの中でプロジェクトワークをこなしていかなければならない。そのような事情も考え合わせると、このレベルの学生にどのような形のプロジェクトワークが適当かつ効果的かという問題が浮かび上がるのである。

では、以下、この3つの理由に対応する部分にそれぞれ焦点を当てながら結果を観察してみたい。

5・2 結果

5・2・1 プロジェクトワークへの学生の関与の仕方について

まず、学生がプロジェクトワークをどのように捉えていたのか、幾つかの質問に対する答えから考えてみたい。

「プロジェクトワークに全部でどれぐらい時間をかけたか」という問いに対しては、グループでは30分から10時間まで、個人では2時間から25時間までと、学生によってかなり開きが見られた。その中に、グループで使った時間が10時間なのに対し、個人で使った時間がそれぞれ4時間・5時間という学生が2名た。ここから、グループ活動が中心だった学生もいるということがわかる。また、そのぐらいかかった時間数を学生がどのように捉えているかを知るための質問2「プロジェクトワークにかかった時間や仕事の量はどうか」に対しては、「少し大変だった」が5名、「ちょうどよかった」が4名と、ほぼ半々だった。実際にかかった時間数との兼ね合いをみると、「ちょうどよかった」

と答えた学生が必ずしもプロジェクトワークに時間を十分にかけしていないわけではなく（注4）、これぐらいの時間がかかるのは妥当だと考えていることがわかる。ただ単に時間数だけではなく、他のコースの授業との兼ね合いなどの個人的な事情や、プロジェクトワーク遂行能力が捉え方の違いをもたらすと予想される。

次に、プロジェクトワークにどのように参加したかを問う質問5には、「先生が『しなさい』とிட்டので、『しかたがない』と思って参加した。コースの成績に関係がなければ、プロジェクトワークはしたくなかった。」というもっとも消極的な答えを選んだ学生が1名、「グループの人に『してください』と言われた仕事だけをした。」と答えた学生が2名、「グループでいろいろなことを相談して、能動的にプロジェクトワークをした。」を選んだのが残りの6名であった。これを見ると、教師側が危惧していたほど「やらされている」という意識が学生には強くなかったことがうかがえる。回答者が少なく、これだけの結果から何かを結論づけるのは危険であるが、これは少し安心できる結果であった。

次に、このプロジェクトワークに上記のように関与した自分の努力をどのように評価しているかを調べる質問7「プロジェクトワークであなたはどのぐらいがんばりましたか」には、「とてもよくがんばった」が3名、「まあまあ」が4名、「あまりがんばらなかった」が2名という結果であった。質問5で「能動的にプロジェクトワークをおこなった」と答えた人との関係をみると、6名中、2名が「とてもよくがんばった」、3名が「まあまあ」、1名が「あまりがんばらなかった」と答えていた。

以上のことからわかることは、学生全てが今回のプロジェクトワークを、必ずしも「教師からさせられた時間のかかる大変な事」というふうに否定的には捉えていないということである。もっとアンケートの回収率が高まれば結果は違うものになるかもしれないが、少なくともこの時点ではこの点に関して肯定的な傾向が読み取れる。

5・2・2 学生がプロジェクトワークで学んだ事、これから学ぶ必要があることについて

これを調べるための質問6「プロジェクトワークをするために教室で勉強した事は十分でしたか」には、8名が「はい」、1名が「いいえ」と答えた。数だけを見ると、学生はプロジェクトワークを進める上で、あるいは発表のために必要なことは一通り学習したと捉えていることがうかがわれる。しかし、質問6に「いいえ」と答えた学生が「どんなことを教室で勉強する事が必要だと思うか」というコメントを書く欄に書いたものは示唆的であった。それは、「特に、分析・理由を説明する部分については（学生だけでは）できそうもない」というものである。このコメントを書いた学生は、グループ内で、分析結果からわかることを書く部分を担当したと思われる。確かに教えた内容を振り返ってみると、グラフや表の説明の仕方は練習を重ねたが、自分の意見の効果的な言い方や聞いている人を納得させられるような理由の言い方を意識的に取り上げることは、ほとんどなかった。本稿4節2・2で述べたような、文末のバラエティに広がりがないばかりか、事実なのか意見なのか結果の説明なのか分かりにくい文が出てきてしまったのも、このことに起因していると思われる。次回のプロジェクトワークではこの点にも十分時間をかけて、指導していく必要がある。

日本語を学ぶ機会の一つとして学生がプロジェクトワークをどのように捉えているかという点を問う質問8「プロジェクトワークは日本語の勉強に役に立ちましたか」には、8名の学生が「はい」と答え、1名が「いいえ」と答えた。「どのようなところが役に立ったか」という問いには、4名が「表・

グラフの読み方と説明のしかた」をあげ、そのほかには「アンケートの質問を文法的に正しく書くところ」「将来日本の会社と連絡を取る時に」「漢字」「考えていることを日本語で表現して書くところ」「日本の文化がもっとわかるようになったところ」という回答があった。日本語5を履修しているほとんどの学生にとっては、日本語で表やグラフの読み方を説明したり、アンケートを作ったりするのが初めての経験であったため、「表やグラフの読み方が役立った」とする回答が多く出てきたものと思われる。一方、「いいえ」と書いた学生の理由は「スケジュールがきつい」というものであった。時間的なゆとりがなければ、学習効果が上がらないということをこの意見は示唆しているように思われる。

以上の事から、学生が何を学んだ（と捉えている）かがわずかながらわかった。

5・2・3 プロジェクトワーク改善の可能性について

質問9ではプロジェクトワークの感想として、良かった点・改善を必要とする点について自由に意見を求めた。良かった点については8名が記入しており、内容は、「面白い結果が得られたこと」「日本人について知る事ができたこと（2名）」「日本語を使ってアンケートの質問を作る機会があったこと（2名）」「公式な発表の仕方を学んだこと」「日本語でグラフを作ったり説明を書いたりできたこと」「話せるようになったこと」などであった。改善を必要とする点については、5名の記入があり、それぞれ「授業のグラフの勉強は時間がかかった」「グループの中で日本語を話す機会がない」「忙しくてグループで集まるのは大変だ（2名）」「発表の時間が守られなかった」というものであった。

では、以下で簡単に、学生から出された改善を必要とする点について、関係する他の質問の結果を見てみたい。

「グループの中での日本語を話す機会」については、質問4を見てみたい。質問4は、プロジェクトワークをしている間の日本語の使用量についての質問である。これを見ると、実際、日本語が使われている割合はとても少ない。「グループで相談をしている時／日本人にアンケートをお願いしたりもらったりする時」の使用状況は、それぞれ「5%／50%」「10%／20%」「20%／20%」「15%／無回答」「10%／90%」「10%／100%」「50%／100%（2名）」「70%／90%」という結果であった。ここで注目したいのは、グループで話し合いをする時の日本語使用量の少なさである。限られた時間の中で話し合いをもたなければならない場合、共通の媒介言語である英語に頼ってしまっている状況ははっきりわかる。日本人にアンケートを依頼したり回収したりする時にはさほど難しい表現や機能も必要ないためか、比較的日本語使用の割合は高い。しかし、話し合ってプロジェクトワークを進めていく過程には、今の日本語のレベルでは対処できない様々な問題があると思われる。実際に授業時間に話し合いを持たせた時にも、意図が伝わらなかったり、伝えたい内容に適した言葉が見付からなかったり、つまり日本語の能力自体の問題でどうしても英語での発話が目立ってしまった学生もいた。この点をどう改善していくかが、今回のプロジェクトワークの最大の反省であり、課題であると思われる。

また、「忙しくてグループで集まるのが大変だ」という意見に関しては、教師側が設定したスケジュールに関係があると思われるので、質問3の結果を見てみたい。スケジュールに関しては、「とてもきつい」が2名、「きつい」が2名、「ちょうどいい」が4名、「時間が十分あった」は1名だった。「とてもきつい」「きつい」と答えた学生四名のうち二名は、欄外に、「他のコースの宿題やレポート

のメ切があったため」と理由を添えていた。この結果からは、プロジェクトワーク自体のスケジュールが学生にとって不適当できついものだったのかはよくわからない。そのため、ここでは「各自、他の授業に追われている中でグループのみんなが集まれる共通の時間を作ること」が、10週間のスケジュールを「きつい」と思わせるものになっている、という指摘にとどめたい。

では、最後にプロジェクトワークをもっと良くするための学生の自由なコメント（質問10）について見ていきたい。寄せられたコメントを大きく分けると、スケジュールに関してのもの、内容に関するもの、最終発表に関するものとなる。そのうち、スケジュールに関しては、「もっと早くから始めて、試験前で皆が忙しくなる前に終わった方がいい」という意見が2名から出ていた。これは、先に述べたスケジュール上の問題への一つの解決策でもある。フィードバックを与える時間をもっと増やし、今回指導が十分ではなかった点に時間を費やせば、現行のように一学期間だけで同じレベルのプロジェクトワークを行うのはかなり難しいと思われる。プロジェクトワークは様々な機能を必要とするものであるから、さまざまな教室活動とリンクさせながらもっと長期にわたって行うという方向も検討する必要があると考える。

次に内容については、「アンケートという調査方法は手間もかかるし、お願いできる人をさがすのも大変だ」「アンケートを作る時間がかかりすぎるので読んだり話したりするプロジェクトワークのほうがいい」という意見があった。一方、「アンケートの方が楽しい」という意見もあった。

また、発表については、「一グループの発表の時間を厳守する」「他のグループの発表の内容が、聞いている日本人には分かって、自分にはわからない」というコメントがあった。特に後者のコメントは、各グループが選んだトピックによって規定される専門的な語彙を他の学生にどう理解させていったら良いか、という問題を提起している。お互いのプロジェクトワークの成果からより多くのものが学べるように、検討していかなければならない課題である。

以上、3つの部分に分けて学生から得たフィードバックについて説明してきた。教師側の受け止め方と違う点、同じ点など結果は様々であったが、改善のための問題提起として興味深いものであった。

6 おわりに

プロジェクトワークのような学習活動は、学習者が中心となり、目標言語を使って自ら設定した課題を自らの力で解決するところに学習の効果が期待されるものであると思う。従って、理想的には教師は、学習者中心だという意識を持って、補助的な役割を果たすのに徹するのが望ましいと思われる。では、真の意味で、「学習者中心」にするためには、どんなことが必要であろうか。今回のプロジェクトワークに教師が関与した度合い、そしてアンケートからわかった学習者の取り組み方から考えられるのは次の三点である。

一つ目は、学習者にある程度課題をこなすだけの日本語能力があることである。学習者が企画立案して自律的にプロジェクトワークをやっていくためには、学習と努力によって課題が解決できるぐらいの日本語能力が必要であると思われる。現在の能力からかなりかけ離れた程度のことを要求された場合、学習者には挫折感が強く、教師の関与も大きくなり、自分たちが能動的にプロジェクトワークをしているという意識も持てないであろう。比較的低いレベルの学習者がプロジェクトワークを行う場合は、

課題設定をやさしくする、時間を十分取る、などの配慮も考えられる。しかし、何よりも必要なのは、自分たちで何とか課題を克服できるという意識がもてる時期（学習段階）に、プロジェクトワークを行うことだと考える。

二番目に大事な点は、学習者がフィードバックを受ける時間が十分とれることである。今回は学習者が提出したアンケートに対しては最低2回、発表原稿については最低1回のフィードバックを与えたが、実際これでは少なすぎたと反省している。言語的な問題でも、技術的な問題でも、それを意識して自分で解決しようとするプロセスがなければ、極端に言えば、間違ったところを直してもらってそれを読んだだけの発表になってしまう。間違いから学習者が自律的に何かを学ぶためには、問題意識を持たせる工夫と努力を教師側が続け、過程をもっと重視した指導を行う必要があると考える。

三つ目に大事な点は、プロジェクトワークに、ある程度の自由度をもたせる事である。今回は、最低限アンケートあるいはインタビューをするよう教師側から指示したわけだが、学生の知りたい情報を集めるのに最適な方法を学習者が選ぶという可能性もあったように思う。口頭会話能力を重視したインタビューによる情報収集、文献調査など、難易度も良く考えて学習者が選んだそれぞれのグループにあった方法を選択させたら、日本語を使用する機能や場面が増え、その中で学習者が学べることもあったと思われる。また、プロジェクトワークのスケジュールに関しても学習者の選択の余地があったほうがいいと考える。今回は学期のスケジュールの関係上、プロジェクトワークをすすめるベースを教師側が設定してしまった。しかし、学習者がプロジェクトワークの運営に責任を持つということが自覚できるように、また、プロジェクトワークの全体を見つつ作業ができるように、スケジュールの立案と管理は本来学生が行うのが望ましいと考える。

以上、今年のプロジェクトワークについて経過を報告し、言語的・技術的な面で教師が気がついた事、アンケートからわかる学生の意識の面などを中心に述べてきた。本稿は対外的にはプロジェクトワークの実践報告ではあるが、個人的には改善のための覚え書きといった性格が強い。次回からは今回の反省を踏まえて、真の意味で学習者が中心に活動することができ達成感もあるプロジェクトワークを目指して、改善を重ねていきたいと考える。

注

- 1 レバノン／アメリカとあるのは、二重国籍の学生である。
- 2 「日本語5」は、国際大学日本語プログラム吉岡薫氏と筆者のチームティーチングで運営されているコースである。従って、プロジェクトワーク全体に関しては、吉岡氏との話し合いの上で進められた。このうち、吉岡氏がグラフや表の読み方・説明の仕方の導入・練習を担当し、筆者が毎週木曜日のグループの指導に当たった。また、同氏の他に、発表を見てくださった方からも今回のプロジェクトワークに関して貴重なコメントをいただいた。本稿にはそれを反映させたところもあるが、記述に関しての責任は全て筆者に帰するものである。
- 3 学生には最低限すべき活動としてアンケートかインタビューと指示したが、実際にはすべてのグループがアンケート調査のみを選択した。
- 4 この4名の学生が答えたプロジェクトワークにかけた時間は、それぞれ、(グループ／個人で)「10時間／4時間」「8時間／12時間」「3時間／10時間」「1時間／5時間」であった。

月 日	クラスですること	週末の宿題
1月9日 (木) 第一週	①プロジェクトについての説明 ②テーマについての話し合い	グループを決める
1月16日 (木) 第二週	①調べたいこと、調べる方法について話し合う ②①のことを外のグループの人に発表する ③仕事の分担を決める	
1月23日 (木) 第三週	①アンケート／インタビューの質問の原稿を作る	アンケート／インタビューの質問の原稿を作る
1月30日 (木) 第四週	①アンケート／インタビューの質問の原稿を作る アンケート／インタビュー原稿提出しめきり (ワープロで書いたものを出す)	アンケート／インタビューの最終稿を作る
2月6日 (木) 第五週	①アンケート／インタビューの質問の最終稿を作る アンケート／インタビュー最終稿提出しめきり	アンケート／インタビューをする
2月13日 (木) 第六週	①アンケートの集計・インタビューの結果をまとめる	アンケート／インタビューをする 結果をまとめる
2月20日 (木) 第七週	①アンケートの集計・インタビューの結果をまとめる	結果をまとめる
2月27日 (木) 第八週	①発表の原稿を作る	発表の原稿を作る
3月6日 (木) 第九週	①発表の原稿を作る 発表原稿提出しめきり	発表の最終稿を作る
3月13日(木)	クラスで発表(期末発表)	

グループ ()

学生の名前 _____

テーマ _____

このテーマについてどんなことを調べたいか：

このテーマを調べるために、しなければならないこと：

(だれに、何人ぐらいの人に、どんな内容のアンケート／インタビューをするか、
どんな資料を使って調べるか、具体的に書いて下さい)

①

②

③

④

⑤

資料4 (フィードバックのためのアンケート)

97年日本語五

プロジェクトワーク

アンケート

1) プロジェクトワークに全部でどれぐらい時間をかけましたか。

グループで () 時間

自分で () 時間

2) プロジェクトワークにかかった時間や仕事の量はどうか。一つ選んでください。

() とても大変だった

() 少し大変だった

() ちょうどよかった

() あまり大変ではなかった

() ぜんぜん大変ではなかった

3) プロジェクトワークのスケジュールはどうでしたか。一つ選んでください。

() とてもきつい

() きつい

() ちょうどいい

() ゆとりがあった

4) このプロジェクトワークをしている間、どれぐらい日本語を話しましたか。

グループで相談をしている時 () %

日本人にアンケートをお願いしたりもらったりする時 () %

5) このプロジェクトワークに、あなたはどのように参加しましたか。

() 先生が「しなさい」といったので、「しかたがない」と思って参加した。

コースの成績に関係がなければ、プロジェクトワークはしたくなかった。

() グループの人に「してください」と言われた仕事だけを、した。

() グループでいろいろなことを相談して、自発的にプロジェクトワークをした。

6) プロジェクトワークをするために教室で勉強したことは十分でしたか。

(あ) はい

(い) いいえ

どんなことを教室で勉強することが必要だと思いますか。具体的に書いてください。

7) プロジェクトワークで、あなたはどのぐらいがんばったと思いますか。一つ選んで下さい。

() とてもよくがんばった。90—100%

() まあまあ、がんばった。70—89%

() あまりがんばらなかった。60—69%

() ほとんどがんばらなかった。59%以下

8) プロジェクトワークは、日本語の勉強に役に立ちましたか

(あ) はい

どんなところが役に立ちましたか。具体的に書いてください。

(い) いいえ

どうしてそう思いますか。具体的に書いてください。

9) プロジェクトワークの感想を書いてください。

<プロジェクトワークの良かったところ>

<プロジェクトワークをして困ったところ>

10) プロジェクトワークをもっと良くするためにどうしたらいいと思いますか。具体的に、自由に書いて下さい。

参考文献

- 倉八 順子 (1993) 「プロジェクトワークが学習者の学習意欲および学生の意識・態度に及ぼす効果 (1) 一般化のための探索的調査」『日本語教育』
日本語教育学会
- 架谷真知子、他 (1995) 「上級学習者のプロジェクトワーク グループダイナミックスに関する実験的考察」『日本語教育』 日本語教育学会